天理スポーツ シンポジウム⑥

おやさと研究所
天理スポーツ・オリンピック研究室
難波　真理　*Mari Namba*

「天理スポーツシンポジウム 2011　未来を創る！　～天理障害者スポーツ」の報告第６回目は、視覚障害の柔道選手としてこれまでにパラリンピック４大会連続でメダルを獲得し、日本の視覚障害者柔道を牽引している藤本聰氏に、競技者の立場からお話を頂いた内容の２回目である。

２月の３連休の時に、東京にある味の素トレーニングセンターという所で合宿をさせていただいた。今までの経験からすれば、なかなか障害者は使うことができない、という印象を受けていた。しかし、全柔連のバックアップで我々は練習をさせてもらった。そこで施設の凄さに驚愕した。オリンピックのディスプレーがあったりもした。柔道場は千畳ぐらいの広さがある。さらに、このホールには卓球場であったり、上にも地下にも施設があり、地下にはボクシングのジムがあったりした。この建物の隣にもたくさんの施設があり、いろんな競技ができるようになっている。柔道場は天井にもビデオカメラがあり、照明がやたらと眩しすぎて、私は眩しいのが苦手なのでものすごく見えにくかった。でもこういう素晴らしい所で、中学２年生から高校２年生ぐらいの日本代表のトップクラスの選手と一緒に練習ができた。

食堂では「勝ち飯」ということで、実際にトレーニングした後は、勤務されている栄養士から、減量するためにはこんな食事をするのがよいというアドバイスをいただいた。我々は、このレベルで他国に負けていると感じた。視覚障害者の柔道連盟はもう少し食事の面を考えなければならないと思った。そういう意味では他国はすごい。こういう所で海外の選手はずっとやっていると思うと、それは強くなると思った。そう感じながら美味しい食事を頂いた。

スライドで示したのは、元参議院議員の神取忍さんである。私は県外に行ったときにいろんな人に会う機会があり、その人にいろんな人を紹介してもらうことがあって、多くの人とのつながりを持つことによって、視覚障害者の柔道をもっとアピールできるようにと活動している。そういう意味で柔道を通していろんな人とお会いできる機会がある。

私は北京パラリンピックの２ヶ月ぐらい前に、手首を“バキッ”といわせ、北京の時は痛み止めを打って試合をした。次のロンドンを目指して両手首を手術する決意をし、今まで３回手術をした。一向に良くならないし、日常生活にも痛みが出る状況だが、それでもロンドンを目指してやっている。痛み止めを打ちながら、ごまかしながら、でも痛いけれども現役にはこだわりたい。楽しいですから。

怪我をして、どこで補えるのかなと考え肉体改造計画を行った。今までにしたことがないようなトレーニングをトレーナーについて死ぬ気でやった。これから先ももっと鍛えていくのでロンドンまでにしっかりとした体ができると思う。やはり、トレーニングはやっていると楽しい。トレーニングはお金を払って人にやらされないと絶対にやらないとも思った。やれといわれてやるだけなので、どれやろう、あれやろうとか考えなくていいから楽である。

今後ロンドンパラリンピックまでの予定であるが、３週間後にトルコで世界選手権があり、これで上位に入ることで日本の出場枠がとれる。７月 11 日に全日本の大会があり、優勝するとロンドン出場が決まる。そして、パラリンピックでは金メダルを獲得予定と思っていて、いろいろなことを乗り越えていい結果を出したいと思う。

柔道を通してほんとに良かったということは、まず、私が視覚障害者でいられたことで、今の自分の立場を作れているということである。それでなければここに座ってお話をすることはできなかった。私は視覚障害を持ってむしろ本当によかったと今は思っている。さらに、柔道を 30 年間続けて、いろんな人と出会うことができ、いろんな人から話を聞くことができた。そういう意味では自分も成長していけるし、人と出会うのが大変楽しい。本当に柔道を続けてきてよかったなと思う。さらにもう一つ、柔道を続けてきてよかったなと思うことはいろいろな現場、例えば中国に行って現状を知ることができた。オリンピック前には、環境の問題であったり食事の問題であったり結構言われていたが、実際問題、行ってみたら、どうっていうことはなかった。なんだ、そんなに目くじらたてて報道するほどのことだったのかといった感じもあった。また、日本の柔道チームと韓国の柔道チームは非常に仲がいいのだが、韓国に行ったとき、はじめは日本人は韓国人にとても嫌われているのだろうなという悪いイメージを持っていた。しかし、実際に話してみたら、どういうことはない、同じ人間なんだと感じ、偏見を持っていたのだとわかった。そういう意味では柔道を通していろんな現場を見ることができたので、いい経験をさせてもらっていると思う。

日本の障害者スポーツ、柔道もそうだが、まだまだ現状は厳しい。私がいろんな人に会うことによって何か一つでも、ちょっとでも変えられたらと思っている。そして、ロンドンで最高の結果、金メダルをとって、またこういう機会に話ができたらと思っている。

（おわり）

追記

３月にトルコで行われた IBSA（International Blind Sports Federation）世界選手権大会において、藤本聰氏は銅メダルを獲得した。この結果を踏まえ、パラリンピックにおける日本の柔道選手の出場枠は７月か８月に国際パラリンピック委員会（IPC：International Paralympic Committee）より発表される予定である。なお、出場選手が決定するのは日本視覚障害者柔道連盟のはなしでは 11 月の全日本視覚障害者柔道大会後ということである。